

Title	チユードル、スチュアート両朝に於ける工業政策(一)
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.391(79)- 401(89)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田文藝

三月號

勤人 (小説)	水上瀧太郎
支那文學の一考察 (評論)	奥野信太郎
襤褸 錦衣 (小説)	加宮貴一
火山地の夜 (短詩)	藏原伸二郎
春の祭と其舞踊 (評論)	松本信廣
弱志 (隨筆)	戸川秋骨
恙の虫 (小説)	岡田八千代
病床記 (隨筆)	南部修太郎
「北村十吉」評をみて (感想)	中戸川吉二
「哲學から教育へ」 (批評)	橋本孝

皆 様

今迄御使用の教科書類で

御不用のものは値の下らぬ

今の内一日も早く御譲り

下さいませ

御葉書一本でござらへても

御伺ひ致します

三田通正門前

大進堂書店

電話高輪三三六八番

雑 録

チュードル、スチュアー

ト兩朝に於ける工業政

策 (一)

高木壽一

(一)

ゾムバルトは、自ら其序文の辟頭に於て、其舊著より採れる所僅に十分の一を出でず而も之等小部分すら尙全然新なる思索によりて律せられ、本書が同一表題を掲ぐるは、本書が主として研究する根本問題及其に關する根本的思想が尙同一なるを示さんがために他ならず、其他の點に就きては内容に於て全然新著なりと云へる

「近世資本主義論新版に於て次の如く謂ふ。消極的には國民經濟學の對象は、法學或は種々なる文化學によりて取扱はれざる範圍に於ける、人間の生活維持の努力 (unterhaltensfürsorge) にして、積極的には國民經濟學は經濟組織 (Wirtschaftssystem) に關する學なりと云ひ得るであらう。……國民經濟學の嚮導概念は經濟組織の概念である。此概念の下に吾人は或一定種類の經濟方法 (Wirtschaftsweise) 即其内部に於て或一定の經濟心 (Wirtschaftsgesinnung) が行はれ、或一定の技術が用ひらるる、經濟生活の一定の組織 (Organisation) を理解する。經濟組織の概念に於て、經濟生活の歴史的に限定せられたる特質は包括せられる。すべて其他の國民經濟學的概念は此上位或は根本概念に發すべきである。」 (Der Moderne Kapitalismus (1919) erster Band Einleitung S. 21-2)

而して、ゾムバルトは「資本主義」を以て一定の經濟組織 (Wirtschaftssystem) と解し次の如く説明する。一定の經濟組織、それは一の流通經濟組織 (verkehrswirtschaftliche Organisation) にし、それに於て規則的に二個の異なる人民の集團即生産手段の所有者、同時に支配權を有し、經濟主體 (Wirtschaftsobjekte) たる生産手段の所有者と、經濟客體 (Wirtschaftsobjekte) としての無所有の純労働者 (Nurarbeit) とが市場を通じて結合せられて協力し、而して營利主義及經濟的合理主義によりて支配せらる。(Der Moderne Kapitalism. S. 319)

形態上に於て、資本主義は支配的及實行的作業者の兩部分即又同時に生産手段の所有者及技術的純労働者として自ら對立し市場によつて生産行程に於て必要なる結合に自ら集合せざるべからざる兩部分に於ける、人的生産要素の社會

的分岐によりて手工業 (Handwerk) と異なるのである。其支配的經濟主義 (Wirtschaftsprinzip) は、自己經濟 (Eigenwirtschaft) 及手工業經濟を支配せる需要充當主義 (Bedarfsdeckung) 及傳統主義 (Traditionismus) に代はれる、營利主義並に經濟的合理主義である。營利主義の特質は、其支配の下に於て經濟の直接の目的は最早、或人の需要充足にあらずして、寧ろ専ら貨幣額の増殖である點に現はれる。此目的性は資本主義的組織に内在する觀念である。故に利潤 (Gewinn) の獲得即經濟行為による元金額の増加を資本主義的經濟の客觀的目的として表示することが出来る。それは必ずしも特に完成せる資本主義的經濟に於て、各個經濟主體の主觀的目的に一致するを要さないのである。

經濟的合理主義即總べての行為の最高可能の合目的性 (Zweckmäßigkeit) によれる原則的調

整は三個の方法に於て現はる。(1) 經濟行為の秩序規律。(2) 狹義に於ける合目的性 (3) 計算の正確。等是である。(S. 319-20)

而して、ゾムバルトは前には、作業者の目的によりて形成せられたる單位を經濟 (Wirtschaft)。作業の目的によりて形成せられたる單位を經營 (Betrieb) と呼び、前者を價值増殖の團體後者を作業團體と稱したるも今や、Betrieb なる一の上位概念を立て此 Betrieb の概念の内に於て、經濟的或は價值増殖經營と作業經營とを分つを良しとすると云ふ。此の經濟經營の採る特殊の形態をゾムバルトは經濟形態と名付くるのである。(Einleitung S. 123) 而して資本主義的經濟組織の經濟形態こそ資本主義的企業である。資本主義的企業は一の抽象的單位即一の營業 (Geschäft) を構成する。其目的は利潤の獲得にして、此目的達成のための特徴的方法は貨幣價值

の給付及反對給付に對する契約である。吾人が「資本主義」と稱し得べきがために存在せざるべからざる最少限は實に此資本主義的企業である (I Band S. 321. 2 Band S. 6) 斯くて近世資本主義の發達とは一面より見れば、資本主義的企業の發達であると云ひ得る。(註)ゾムバルトは資本主義的經濟組織に於ける諸要素の詳細の説明を Grundriss der Sozialökonomik 4 Band: Specifics he Element der Kapitalistische Wirtschaft に譲るも筆者は未だ不幸にして此書を手に得ず、又ゾムバルトにとりては、各時代に對して各々異なる經濟心 (Wirtschaftsgeinnung) 行はれ、それに適する形態を與へ、それを通じて經濟組織を形成せしむるは此精神 (Geist) なりとは彼の根本思想である。此根本的思想は既に「近世資本主義論」第一版に現はれたる所にして、今や益々明確のものとなり、總べての説明の嚮導觀念となつた。近世資本主義的經濟組織を形成せる動力 (treibenden Kraft) は實に、企業的精神、

並に市民的精神との二精神の一體に結合によりて成れる資本主義的精神である。此精神こそ資本主義を形成したるものである。遮莫、精神は地上に於て全能のものではない。それに從て生活形成せんに或一定の諸條件を充足せねばならぬ。(I Band S. 25. S. 327. 9)此の資本主義的發達にとりて根本的條件となるものは、國家、技術、及貴金屬生産の三者である。之等の三條件は直接に資本主義的經濟組織に影響を與へ更に、其資本主義的發達の促進の尙著しきものあるは、他の重要な諸條件を實現せしむる間接の影響である。即資本主義的經濟組織の必須の前提條件たるべき市民的富 (Bürgerlichen Reichthum) の成立は之等三個の條件の協力によりて可能となり、又財貨需要關係の新形成 (Neugestaltung des Güterbedarfs) に對しては一部は直接に、又一部は此市民的富の仲介を俟ち

によれば、一人の意志の下に於ける多數人の人為的結合體としての近世君主國家が齎らせる重大なる影響は就中次の如きものである。即第一に、廣大なる地域に於ける人民を國家の目的に貢獻せしめんとする君主國家の目的の充足せられんがためには、自ら生活上の状態に最も大なる影響を有するものとなるべき、一系統の諸政策が行はれる。即諸勢力は結合せられ人民は一定の行爲又は不行爲に對して指揮せられねばならない。一の組織、一の行政施設が成立する。斯る統治策の一體系は屢々反復存立し、歴史の經過に於て、更に進んで、主體として又客體としての作用をなす。第二に、國家目的の客體たる臣民は其自らの生活状態に影響を與へらる。即國家の支配制規は各個人の生活の内に及び、又同時に多くの生活團體 (Lebensgemeinschaft) を一の生活團體に集め、前に分離し居たるもの

て間接に影響を與へる。勞働力の供給も亦、技術の影響の下に、大部分、直接又は間接に國家と相俟つて技術の影響の下に生じたのである。其他企業家階級の成立、及構成に影響を與ふるも、之等の間接的影響は措き、三個の根本條件たる、Staat, Technik, Edelmetallproduktionが資本主義的發達に及ぼせる直接の影響を見るに技術は大量生産並に運輸を先づ可能ならしめ、新技術方法によりて新産業を起し、又貴金屬生産は多くの方面に於て經濟生活に影響を與へ、資本主義的發達を促進すべき方面に於て市場を構成し、又資本主義的精神を高めて營利衝動を強め計算の正確 (Rechenmäßigkeit) を完全ならしめたる等の力を有せるも (I Band S. 332) 之等に關する説明を與へんは本稿の目的とする所にあらず、茲には唯近世國家が資本主義的發達に對して有せし意義について觀察する。ゾムバルト

を結合する。

ヨーロッパに於ては、十字軍以來第十八世紀末に到るまでの長き時代は恰もゾムバルトが初期資本主義の時代として示せる時期にして、專制君主國の發達によつて著しく、其内に於て全く外面的に、近世資本主義が發展するに到つたのである。而も、近世國家の生活機能 (Lebensfähigkeit) の大部分は内部に於ては近世資本主義の發生と關係に立つ。即或は前提條件となり、刺戟促進となり或は又其障害とも看做されるべきである。假令、資本主義的發達の自覺的直接の促進は唯、マーカンチリズムの經濟政策に現はれしのみなるも、尙國家生活の他の部門ありて間接に資本主義的狀態の到達に極めて重要な意義を有するものである。

斯くて、ゾムバルトは、國家が資本主義發達に及ぼせる影響の觀察に於て重要な方面を以

て、(1)軍備制度(2)商工業政策(3)交通政策(4)鑄貨及本位貨幣政策(5)植民政策(6)教會政策(7)勞働政策(8)財政。等を擧げる。(I Band S. 339-40)

茲に豫めゾムバルトの所謂「經濟時代」 Wirtschaftsepoche の觀念に就いて述べなければならぬ。

二

ゾムバルトによれば、經驗上限られ得る一時期に於て一の經濟主義と、其に應ずる經濟組織の支配が何等束縛せられざる程にして、又他の時期には之に反し新經濟主義が、支配しつゝある經濟組織の圏内に於て承認を求めつゝあるを見るのである。換言せば、何れの新經濟主義も先づ其當時の經濟組織の圏内に於て成熟せんと努めねばならぬ。其實現のために經濟形態を形成するも、其形態は尙本質的には、他の其當時の支配的經濟主義より産出せる經濟秩序により

て決定せられ、先づ徐々に其精神に従て全經濟生活を形成し得る。新經濟組織の立場よりすれば、新經濟主義が舊秩序の圏内に於て活動せる時代は其初期 (Früh epoche) にして舊經濟組織よりすれば、其晚期 (Spät epoche) である。其中間に、一の經濟組織のみの精神が充分の發展に到達せる、經濟組織の隆盛期 (Hoch epoche) が存する。(I Band S. 256) 而して新經濟時代の生せんとするや、經濟生活は新經濟組織の觀念 (Idee) に徐々に接近せんとし、此接近は一步一步に生じ、時間的連續に於て、其生を求めつゝある經濟組織に内在せる諸傾向 (Züge) の、一部は内面的にして一部は外面的なる發達を意味するものである。内面的に其發達は次の如くして行はる即、一の經濟組織の特殊要素が他の經濟組織に従へるものとなり、本質的單位に結合し、斯くて其總體に於て、經濟を營む新方法を形成

する。何處にか新經濟方法の一の特殊傾向が出現するや、第二、第三のものが之に續く。斯くして經濟生活の諸方面に新組織の特殊要素が益々完全なる形態に發展する。斯る内面的發達と相並んで外面的發達が行はれる、即ち新經濟原則及經濟形態が益々廣く行はるるを見るのである。

されば、初期資本主義時代を以ては、資本主義的經濟組織が舊經濟組織と相並んで史上に現はれ、内面的には其最初の起源より完成まで、外部的には略々其獨裁 (Alleinherrschaft) にまで發展せし經濟時代を理解せねばならぬ。從て資本主義的經濟組織の最初の起源は初期資本主義時代の時間的區劃のための出發點である。

而して此起源 (Anfang) とは、資本主義的觀念範圍に屬する現象の全く個々別々の出現を意味せずして、明なる資本主義的諸傾向が大なる

範圍に即、興衆的現象 (Massenerscheinung) たるを示さねばならぬ。本質的なる資本主義的傾向は興衆現象として現はれねばならない。而して資本主義的精神の外面的活動、經濟の外面的形態に於ける此精神の沈澱物 (Niederschlägen) を求め、其最初の現出より資本主義の起源となす。財の生産、交換、分配が、其正常、一般の經過に於て資本主義的經濟組織の諸原則に従て行はるる場合にのみ資本主義と稱し得べく、之に反し資本主義の概念より分離せしむべきは經濟上の全過程に關係なき總べての貸借關係である。債務的關係以外には自己經濟の組織なる地主階級の外何物をも認めざる場合に資本主義と云ふは無意義にして、又日常經濟生活の全過程に交渉なき限り、公共の債務、公共經濟等を資本主義に歸せんは不合理である。尙、手工業者が或種の金主 (Geldgeber) に從屬する場合に假令此金主が、

商品を手工業者より買取る商人なりとしても此場合に既に資本主義を認めんとするは同じく認つて居る。茲には唯「資本に對する間接の從屬」と稱し得る。而も此語も亦、嚴密に云へば、既に到る處に資本及實際に資本主義的經濟形態の存する時に始めて許容せらるべきものである。

寧ろ、次の二條件の充足せられざる以前に、或時代に資本主義を置くことなきを妥當なりと思はれる。即(1)經濟上に活動する人の他人の意志が貨幣の媒介手段によりて營利目的に使用せらるること。(2)斯る他人の意志の從屬と、尙常に、最高可能の利潤獲得の見地より經濟生活の合理化を目的とする經濟關係の新秩序(*Neuordnung*)への傾向とが結合すること。の二つである。一言に盡せば、吾人が資本主義と云ひ得べきがために存在せざるべからざる最少限は、假令初めは全く幼稚の狀態なるにもせよ、資本主

(*Hochkapitalismus*)への變遷に到るまでの時代を抱含する。之に反し、其狹義の時代を略々第十五世紀中葉より、第十八世紀の中葉に到るまでの時代即資本主義の本質の決定的一般的なる起源より、英國が資本主義隆盛期に入るまでの時代と定め得ると云ふ。(II Band. S. 145)

次にゾムバルトは、「近世資本主義論」序文の中に於て、本書に於ける彼の歴史研究の態度に就きて次の如く云ふ。

明に歴史に問ふべき二個の可能性あり、そは嘗て一度發生せし事或は反復繰返されたる事である。前者は其事件の單一性によりて特殊歴史的問題、後者は其反復せられしを以て社會學的問題と稱するは、兩者俱に正當にして、總べての史書は此兩問題に資せんとするものである。元より觀察の對象に應じて一の他に優れることあるべく、傳記と狀態史とは極端の反對を

義的企業である。而して、吾人が初期資本主義時代を劃するがために有する目的點(*Terminus ad quem*)は、資本主義的經濟組織に屬する諸傾向が、興衆的現象として完成に達せる時を決定することである。(II Band 36) 此初期資本主義

時代をヨーロッパ史に於て如何なる時に置くべきか、即如何なる時、如何なる地に近世資本主義の起源を定むべきやについては、ゾムバルトは先づ第十三世紀のイタリーに於ける資本主義的商業に其起源を求め、其後に其他の諸國に於ける起源を認められたれども、後に述ぶるが如き彼の研究態度よりして、全ヨーロッパ經濟史に於ける、初期資本主義時代を區劃せんとして、廣狹二個の時代に區別して居る。即廣義の初期資本主義時代は略々第十三世紀中葉より、第十九世紀中葉に及び、ヨーロッパに於ける資本主義の最初の現出より本西歐諸國の資本主義隆盛期

を示すものである。此兩個の問題は經濟史に於ても亦正に存在するも、茲には何等の *Entweder-oder* なく、唯 *Sowohl-als-auch* あるのみである。有用なる經濟史は、特殊性の發見を特に明ならしむるに、單に補助としてのみならず、眞に基礎として、歴史的社會學的研究を必要とするものなるを強調せられねばならぬ。斯くて先づ、如何なる經濟的現象が一般的なるや即反復繰返さるるやを決定したる時初めて、吾人は吾人によりて考察せらるる問題の特殊性の奈邊にありやを確言するを得るのである。

本書の特徴は實に、經濟的現象の一般性に對する問題が最も極端なれども尙許さるべき範圍にまで擴張せられし點に存する。其限界は西部、南部ヨーロッパ諸國民によりて立てられたる文化的範圍である。又其觀察せらるる範圍内にては問題は更に特殊歴史的問題である。即「近世資本主

「史あるのみにして單なる資本主義史ではない。而して斯る限界の中に於て、各國民の特殊性は暫く措き、先づ近世資本主義の成立に導ける如何なる經濟的現象が全ヨーロッパ國民に一般的のものなるやが考察される。此問題の充分是認さるべきものなるを信するのみならず、既に云へる如く、此經濟的發達の全ヨーロッパ一般の特質の確定は更に小なる範圍の經濟的事件を考察して多大の効果を擧げんがために必須の前提たるものである。ヨーロッパ經濟史の如何なるやを知りて後、始めて獨逸、フランス、英國其他の各國經濟史を記し得べきである。數學者が $ab+ac+ad$ を $a(b+c+d)$ となす如く、其各々はヨーロッパ的並に國民の本質よりの產物たる全歐經濟史より、ヨーロッパ的基調を抽出し其本來の状態を研究せんとす。如何なる歴史家も熟慮の後斯る研究方法を狹義に於ける歴史

研究と共に其正しきを認めざるを得ないであらう。(Geikie XVII-XVIII) 本書に於て大體以上の如き立場よりゾムバルトは敘述をなすも、而も彼が「近世資本主義論」舊版より以後に行はれたる資本主義發達上の部分的問題に關する諸著の目的とする所は、斯る個々の研究によりて専ら之等の部分的問題の研究に暫く没頭するの要あるを以て研究者の觀察を問題の一面に集中せんとせしに外ならずと云ふ。

依て本稿に於て初期資本主義時代に於ける國家殊に其(2)商工業政策が資本主義の發達に及ぼせる影響を考察するに當り、先づゾムバルトが擧げたる一般論を述べ然る後に斯る經濟政策が當時の英國經濟生活に及りて又其組織の變化の上に如何なる影響を與へたるかを見る。洵に英國はノルマン諸王の勢力確立の時代より以來、決してヨーロッパ大陸の或國々の如く、中央政

府の支配より完全に脱却せしことはない。ヘンリー二世及其後繼者によりて刻苦完成せられたる法律的行政的機關。エドワード三世の下に於ける議會の立法上の活動等、之等は廣く全國を單一の包括的政治組織の範圍内に齎らした。ヨーロッパ大陸の大部分に亘りて、中世後期に於ては中央國家的權力は存在せず或は又極めて微力のものにして經濟生活の支配に於ける其地位は多數都市の權力によつて占められた。工業的、商業的諸關係の單位は都市にして、國家或は後に獨逸に於けるが如き領域ではなかつた。英國は此點に於ても他の經濟的諸點(マナーの普及、ギルドの發生等)の如く他の西歐諸國と等しくなかつた。英國に於ても亦吾人は中世後期の時代の特徴を都市經濟の時代と云ふも而も數個の都市は決して、イタリー或はドイツに於けるが如く全然外部の支配より獨立せるものではな

つた。殊にチュードル朝の時代に到るや、人民の經濟生活に及ぼせる中央政府の權威は更に極めて明確なるものとなつたのである (Ashley: Economic Organisation of England p. 95-6)

而して、ゾムバルトによつて初期資本主義時代を以て劃されたる時期は、少くとも英國に關する限りに於て、之を國家の經濟政策の方面より見れば大體に於てマーカンチリズムの時代に合致すと云ひ得べく、茲には此時代に於ける、チュードル、スチュアート兩朝の經濟政策殊に主として工業政策が經濟生活に與へたる影響の觀察を目的とする。(未完)